
アリソラ ~ ARIASの宇宙(そら) ~

夏川四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリソラ ～ARIASの宇宙ウチウ～

【Nコード】

N0020BA

【作者名】

夏川四季

【あらすじ】

宇宙開拓時代。

人類が地球の外に資源を追い求め宇宙に飛び立ってから、はや30年。

民間護送会社ARIASから1隻の宇宙戦艦が飛び立とうとしていた。

その戦艦の名は銀河。

宇宙という巨大な海を行く非武装通商宇宙船を武力や海賊から守るため、銀河爆誕！！

おそらく新感覚！？

ライトノベル調SF小説。

さかがみとうや
坂上刀夜は人外の力を他人に隠したまま、航空戦闘部隊、ARIA
S航空課に所属することになった。

お約束、美少女艦長を筆頭に、怒らせると超怖い長官の姉さん、ク
ールビューティーなエースパイロットの先輩、物静かな美少女オペ
レーターに、堂々とできない航空機エンジニアの後輩少女とユニー
クなヒロイン勢。

様々な仲間たちが面白おかしく送る宇宙の旅に、あなたも一緒に旅
立ってみませんか？

某出版社に応募しようと考えている作品です。

良ければ、みなさまのご意見ご感想をお聞かせください！！

第1話 『ハンマー注意報発令中』

夜空には、赤い光を放つ月がまるで人々をあざ笑うかのように悠々と浮かんでいた。

月面都市の神々しいほどの明かりが、地表に降り注いでいる。

月に向かって伸びるように建っているビルは、対照的に真っ黒な闇が支配していて、物音ひとつ聞こえない。4車線の国道には車1台すら走っていない。

少し前まで人工の明かりが支配していた都市は、今や真っ暗なゴーストタウンと化していた。

この1年で天災、戦争が日本を限界まで追い込んでいた。

春先に起きた大地震で多くの人が住む家を失った。夏的大型台風により、作物が大きな被害をこうむった。秋には、北から攻めてきた敵によって沢山の人が死んだ。

日本は、その国家としての意味をもう果たせなくなっていた。

大都会東京に住む人はもうほとんどいない。疎開するように、人々は地方に散らばっていったからだ。

この国は。天災に負け、戦争に敗北し、静かなる終焉を迎えようとしていた。

あれから、8年……。

日本は新たな道を進んでいた。

どこまでも、広がる青い空と青い海。

見渡す限りの青い空間を俺、坂上刀夜さかがみとうやが乗る飛行艇が駆けていた。眼下に広がる広大な大海原の景色は、数時間ほど前からさほど変化していない。たまに、小さな無人島が見えるぐらいで、それ以外は青々とした景色が水平線の向こうまで広がっている。

「へえ。ずいぶん若いと思ってたら、航空学校の生徒さんだったのか」

俺の横で飛行艇を操縦しているパイロットの男性がもの珍しそうに言った。

「はい、姉の急な呼び出しがあったので……」

「そりゃあ、大変だなあ。でも、久々に日本に戻ってきたんじゃないのか？」

「ハハハ。そうなんですよ……」

2日前、俺の元に1通の手紙が届いた。差出人は坂上風音さかがみかきね。民間護衛会社という、なんとも物騒なところに勤めている俺の姉さんからの手紙だった。

手紙書かれていたのは、簡素な書き出しと、時間と場所だけ。

何故自分が呼ばれたのか分からないが、行かなければ後で酷い目に会う前に、身支度としては指定された場所に向っていた。

飛行機が離陸してから3時間。俺は、パイロットの横の席に腰を下ろして外の景色を眺めていた。

「おっ、見えてきたぞ」

パイロットの言葉で、俺は進行方向に目を向けた。そこには、洋上に浮かぶ小さな島が見えている。

「思っていた以上に、ずいぶん賑やかそうな島ですね」

「ちょっとした街が島の中にあるくらいだからな」

彼の言うとおり、島には人口の建物が結構建っている。

飛行艇は序々に速度を落としていき、島近くの海に着水。数回の振動とともにその体を海に浮かべた。

島に飛行艇が近づくと、岸壁が左右に向って2つに分かれる。割れた岸壁の中から幅20メートルほどのトンネルが姿を現した。

「へえ……。なかなか、手が込んでるな」

「戦艦（、、）が中にあるからな。あまり他国を刺激しない為に、表向きには置けないからな」

パイロットが呟いた言葉の中にあつた『戦艦』という単語。

強大な砲を持つ海上の要塞。しかし、前時代的とされ、この兵器を使う国は無くなった。しかし、時代は変わった。海洋を活動を主としたものではなく、宇宙空間での活動を主として考えられた戦艦が造られるようになったのだ。

宇宙戦艦（、、、）。人はその船をそう呼んだ。

人類はここ100年間に目覚ましい進歩を遂げた。

枯渇していく資源を何とかしようと宇宙へ飛び出して、様々な資源を手に入れ、人が住める環境を作りのために各国が宇宙開発を進めていった。

そういつた過程で、近場の資源の取り合いが起きるのは珍しくない。星を手に入れ、安全な資源の採掘、居住空間を建設する為に自衛の為に兵力が必要となる。

そこで注目を浴びたのが、強固な防御力。大火力の兵装を持ち、一度に沢山の物資や人さえも運べる宇宙戦艦だった。

かくして、人類は宇宙開拓時代とともに宇宙戦艦建造の時代を迎えることになる。

西暦2185年の現在。

人類の活動範囲は、ずいぶん広がった。

火星は第2の地球としての開発は既に終了し、続いて、月面都市、コロニーの建設が進められていった。

テラホームイングの技術は、火星には劇的な変化をもたらした。気温を安定させ、永久凍土や地中深くの氷が解けたおかげで、雲ができて、雨が降り、海が作られた。

見違えるほどの美しい星になった火星には、現在30億の人々が住んでいる。

目覚ましい人類の発展とともに人類の勢力圏もまたずいぶん昔と異

なっていた。

2000もの国家がひしめいていた地球は、今では4つの巨大な国家が主導権を握っている。

南北アメリカと大西洋の小さな島々を含めた、『南北アメリカ連邦』。ヨーロッパとアフリカを含む、『EAU』。ユーラシア大陸の大半を占める、『ユーラシア人民共和国』。そして、日本を中心とした太平洋の小さな島々を含む、『太平洋皇国』。

様々な国が侵略され、統合した結果、現在の勢力図に至った。

この4大国家になったおかげで、軍事バランスが取れた地球にしばしの平和が訪れていた。

資源に関する小さな戦闘はあるものの、今のところ大きな戦闘には発展していない。

(まあ、いつこの平和が脅かせるような事態になるか分からないけどな)

事実、一度滅びかけた日本は特にそういうことを意識が強く、自衛のための軍備には結構な金額を出資しているらしい。

「さあ、到着したぞ」

薄暗いトンネルの終着点は、小型の艦艇がいくつか止まっている小さな軍港のような場所だった。

近くの栈橋に飛行艇が横付けされる。

「ほんとは、俺1人で操縦してくればよかったですけど」

「なあに、かまわないさ。ちょうど、俺もこの近海に用があったからな」

「ありがとうございます。助かりました」

一言礼を言って俺は栈橋に飛び移った。

「それじゃ、俺はここで失礼するぞ」

パイロットの男性は手を振った後、飛行艇をもと来た道に向けて帰っていった。

その姿を見送った後、俺はポケットから1枚の手紙を取り出した。

「姫島か……」

姉から送られてきた手紙に指定されていた集合場所。

計画倒れとなったレジャーランドの建設用地を民間護衛会社^{アリ}ARIASが安く買い取って、私立学校を建てたことで有名な島だ。

島の東側に大きな学校があり、島の西側に学生のための居住区がある。

通称学生街と呼ばれるその場所は、学生のためのマンションから格安ショッピングモール、映画館、レストランなどほとんどのものが揃っている。

まるでちよつとした街だ。

もともと、ARIASの主な仕事内容は、通商宇宙船の護衛と国家絡みの重要物資の運送。簡単に言えば、武装していない通商船を守るボディーガードのような仕事。

だが、そういった仕事を請け負っている傍らで、孤児になった少年少女を引き取って、教育を受けさせている。

そんなARIASが所有している艦艇は、軍の払い下げの旧型艦だがその数は、一個艦隊に匹敵するほど。

太平洋皇国で一番大きな民間護衛会社で間違いないだろう。

「さて、島に来たのはいいが、一体姉さんはどこにいるんだ？」

あたりを見渡すが、姉の姿は見当たらない。

困ったな。

アバウトすぎる集合場所だから、どこか分からないぞ。近場に、知っていそうな人は。

辺りと見回していた俺は、向かい側の栈橋で小型船の掃除をしている人影を見つけた。

あの人にも聞いてみるか。

近くに向かい側に渡る橋があつたので、向かい側の栈橋に迷うことなくつくことができた。

栈橋にたどり着いた俺は、さっき人影が見えた小型船に向つた。

リズムカルな掃除の音とともにデッキブラシを片手に小型船を掃除している少女が見えてきた。

おそらく俺と同年代だろうその少女は、鼻歌混じりに掃除をしている。
掃除の邪魔にならないように、ストレートの長い黒髪をくくってポニーテールにしているのが特徴的だ。
白と黒を強調したエプロンドレスが女の子らしさをかもし出している。

この場所にあっていない格好だが、声をかけないわけにもいけなかったので、俺はその少女に声をかけた。

「あのスイマセン」

「はい、何です……か？」

少女は世の男性ならイチコロになってしまいそうな笑顔でこちらを振り返った。

その胸元には、『ひめかわ 姫川かぐや』と書かれた可愛らしい名札ついている。

何より驚いたのはその容姿。

さらっと流れるように伸びる黒髪にルビーのような紅色の瞳。少女のような清楚さと、大人の女性のような妖艶さを合わせた姿に俺の目は奪われていた。

だが、固まっていたのは俺だけではなく、少女も同じだった。

俺の姿を見て、まるで時間が止まったかのように固まっている。まるで目の前で、何か想像を絶する何か起きたかのような顔だ。

「えっと、大丈夫か？」

取りあえず、声を掛けてみた。すると、彼女の顔が見る見る内に青ざめていく。

「はにゃ~~~~~!!!」

そして、新種の生物みたいな鳴き声を上げて、彼女が後ろに跳んだ。

「お、おい。大」

「み、見たわね!」

「はっ？」

ちよつと待て、話の意図が分からない。一体何が起きたんだ？

「絶対、許さないんだから!!」

「いや、意味わからないいいんだが……」

いきなり、許さないと宣言されたらどうしたらいいんだ？

俺の、思考が止まりそうになる。

「今ここで見たものすべて忘れなさい！ データ消すみたいに記憶から綺麗さっぱり抹消しなさい！」

「俺の頭はコンピュータじゃないからそう都合よくできてねえ！」

「じゃあ、私とその記憶ふつとばしてやる!!」

少女はそういうと、小型船に置かれていた柄の長さが一メートルほどのハンマーを手に取った。

「ちよ、ちよつと待て！ そんなもので叩かれたら、記憶どころか魂まで飛んでいくだろうが！」

「問答無用!!」

少女はそう言つて、大きく振りかぶったハンマーを振り下ろしてきた。

すんでのところでそのハンマーをかわす。目の前を通過したハンマーは目標を失い、木製の栈橋をぶち抜く。

盛大に栈橋に穴が開き、木片が飛び散る。

「死ぬ！ それが当たったらマジで死ぬから！」

「アンタなら死なないわよ！」

「どんな根拠だよ！」

少女は、手当たり次第にハンマーを振る。その結果、栈橋がどんどん穴だけになつていく。

シャレにならん。

可愛いやつだが、性格が手におえるものじゃない！

本気でかわさないと、俺の死亡フラグが立つ。

そう思い逃げの一手を打とうと思つた時だった。

左足に力をかけた瞬間、いきなり床がなくなつた。

「なっ!?!」

木製の棧橋が崩壊したのだ。ずいぶん古い棧橋みたいだったし、
どうやら基礎が折れてしまったのだろう。

しかし、この被害をこうむったのは俺だけではなく、間合いを詰め
てきた少女も同じだった。

一瞬の浮遊感の後、盛大な水しぶきを上げて運河に落ちた。

夏とはいえ、トンネル内の海水は冷たい。

チクシヨウ。

なんで俺がこんな目に合わなきゃいけないんだ。

いきなりハンマーで殴りかかれておまけに運河に落ちるとは、今
日は相当ツイてない日に違いない。

薄暗い水中で俺は、脳内でグチを漏らした。

第2話 その1 『長官は姉さん!?!』

「全く、アンタのせいですぶ濡れになったじゃない!」

ハンマーで襲いかかってきたエプロンドレスの少女は、怒りながら無駄にヒラヒラのついたスカートを絞ってている。

容姿は文句なしの美少女だが、やっぱり性格に難癖ありだよオマエはな。

「知るか。あと、棧橋を壊したのはオマエだ」

「オマエって言うなっ! 私は泣く子も黙る姫川かぐやよ!」

なぜその表現をした。どっちかという泣く子も大泣きするの方が似合ってるぞ。

「そもそも、アンタは信用ならないよね」

「だから、ここであったことは誰にも言う気はない」

俺は早くこの海水でベトベトになった服を着替えたいんだ。せめて真水ならまだマシだったんだが。

「私はアンタのことなんて0.0001パーセントも信用できないわ! ばらすだけばらして国外逃亡の可能性だつて...」

「ねえよ!」

どんだけ信用してないんだよ。そもそもそれぐらいのことで国外逃亡するかっての。

はあ……。

こいつと話していると無駄に体力が消費される。

「いい? ばらしたら、アンタをバラすわよ!」

恐ろしい脅し文句で俺に圧力をかけてくるが、こっちはそれに相手してやるのも疲れてきた。「大体何でそれぐらいのことでキレるんだよ」

「それくらいとはなによ! これは私のプライドに大きく関係してるのよ!」

大興奮で激怒すれ姫川。

そんなに怒るほどのことなのかよ。

鼻歌交じりに掃除していたのは誰だ？

実は結構楽しんでたんじゃないのか？

「分かった、分かった。誰にも話さなかったら万事OKだろ。だから、もつと話の通じる人間のいるとこに連れてけ」

「くううう。アンタ私をバカにしてるでしょ！」

「バカにはしてない。オマエはオマエなりに頑張ってる」

「バカにしてるじゃない！」

物凄い形相で俺を睨みつける。何だか目からビームでもそんな感じだ。

でも。

何で怒っているのにそんなに可愛いだ？

意識してしまつと、目を見て真面目に話せそうにない。

急に俺が目をそらしたので、調子が狂ったのか、急に姫川が大人しくなった。

「そついえば、アンタの名前は？」

「坂上刀夜」

「坂上……。もしかして、坂上長官の弟って……」

「俺だよ」

俺の姉さんは18歳という異例の若さでARIASの女艦長として電撃デビュー。

その並外れた戦術、判断力、そして感から、海賊のみならず正規軍の船乗りたちから恐れられることもよくある。

今は、教育長官という新人育成のための最高責任者として働いてる。

「へえ。アンタがね……」

何やら意味ありげな言葉を言いながら、姫川が俺の周りを一周した。

「特徴的な灰色の制服。肩に赤いラインが2本か。それ、航空学校の上級生の制服でしょ？」「ああ。ミッドウエー航空学校だ」

航空学校とは、未来の飛行士、或いは航空機エンジニアを育成する学校だ。

その幅は、旅客機のパイロットから戦闘機のパイロットとまで幅広い。

「で、何で航空学校の生徒がこんなところに？」

「姉さんに呼び出しを受けてな。おっと、噂してたら来たみたいだな」

橋の向こうからこちらに向かってくる人影が見える。

白色の制服に金色の矢の刺繍が入った帽子。

初めて見た格好だがすぐにそれが姉さんだとわかった。

「あら、姫川さんと一緒にいたのね」

帽子を取り、綺麗な銀髪をかき分けると姉さんはクスツと笑った。

その笑みは姫川の時とは違った大人の女性特有の妖艶な笑み。だが、その笑みをの裏からにじみ出る黒いオーラが見えるのは俺の気のせいではないだろう。「2人揃って海水浴でもしていたの？」

「ま、まあ。色々あつてな」

そういつて、俺は姫川に視線を向ける。

「な、何よ！もしかして私のせいにするの！？」

あからさまに慌てている姫川からしてすでに姉さんの様子を察しているようだ。

「大体、アンタがあ現場をみる方が悪いのよ！」

「なっ！あんなの見るなっていう方が無理だぞ！」

口論を始めよる俺と姫川の間には姉さんが割ってはいる。

「刀夜。何時集合覚えてる？」

背後に雷雲から顔を出す龍が見えてきそうな笑顔で俺を追いつめる。

「マズい！」

かなり、怒ってらっしゃる。

「2時30分です」

「うん、そうだよ。今何時何分だか知ってる？」

姉さんが俺の目の前に懐中時計を突き出す。

今時珍しいアナログ時計の針は2時53分を指している。

「……スイマセン」

「ふふ。分かればいいのよ」

姉さんの後ろで、一安心している姫川が目に入った。

くそう。難を逃れやがって！

だが、今姉さんに説教されている俺は反論などできない。

しようものなら精神がおかしくなるまで説教を食らう羽目になるかもしれない。

「あつ、そうそう。姫川さん？」

「は、はひい！？」

俺を説教してた姉さんがいきなり姫川の方を向いたのでかなり動揺したらしい。

「棧橋が崩壊してたんだけど、あれはどうしたの？」

「あ、あれはですね……」

「まさか、エプロンドレスで掃除をしていた姫川さんに刀夜が声をかけて、恥ずかしくなった姫川さんが船内のハンマーを振り回した結果、棧橋が崩壊しちゃった。ってことは無いわよね？」

その場に居合わせたわけでもないのにまるであの事件を見ていたかのように的確に状況を把握している。

毎度思うのだが、この人だけは敵に回したくないと思う。

「それがですね」

「私は、この服を着て掃除しろと言ったけど、棧橋を破壊しろとは一言も言っていないわよ」どうやら、姫川は姉さんの定番罰則のひとつ、『メイド服で掃除の刑』に処せられていたようだ。

この罰則は読んで字のごとく、メイド服、つまりエプロンドレス姿で指定された場所を掃除させられる恐ろしい刑だ。

この刑のさらに恐ろしいところは、女子に限らず男子にも有効であるということ。

はつきり言つて、男がメイド服で掃除する何で死んでもごめんだ。

俺なら恥ずかしくて死ぬぞ。たぶん。

他にも『逆立ちして廊下ライブの刑』とか『空気イスで会議主席の刑』などといった精神的にも体力的にも恐ろしい罰則が沢山ある。

「どうなの？ 姫川さん」

「……スイマセン」

さすがの姫川も、迫力に負けて白旗を揚げる。そうだ。

その判断は正しい。

変にプライドを気にして姉さんに刃向かったところで勝てる訳がない。

姉さんは見た目も優しそうな雰囲気を出しているし、普段は面倒見もよくて非情によい性格をしている。

だが、起こらせたら最後、鬼のようなプレッシャーで相手を圧倒する。

あのプレッシャーは洒落にない。

姉さんを怒らせるぐらいなら、サファリパークの猛獣ゾーンを走り回る方が怖くない。

「ふう。2人とも高校生なんだからしっかりしないといけないですよ？」

「「ごもつともです……」」

声をそろえて頭を下げる俺と姫川。なんとというか、言い返す言葉もない。

腰に手を当てて帽子をかぶり直すと姉さんはいつもの優しいオーラに戻っていた。

第2話 その2 『漆黒戦艦のレールガン!?!』

「さてと、いつまでも説教しても話が進まないから本題に戻るわね」

姉さんは、手にしていた紙袋を差し出した。

「本日から正式にARIAS航空課の仲間入りよ。一隊員として頑張ってるね」

「了解」

ズシツと重い紙袋を受け取ると、俺が姉さんに向かって敬礼する。それに合わせて姉さんも敬礼する。

500メートルほど進む大きな広場のような空間があり、そこには1〜6番までの数字が振られているエレベータがあった。

姉さんは迷うことも無く、5番のエレベータに乗り込む。

エレベータの番号を見たとき、あからさまに姫川が嫌そうな顔をしたが、気にしないでおこう。変に話しかけたり、チラチラ見ただけで激怒されては俺の力が持たないからな。背筋がゾクツとするような浮遊感を感じさせながらエレベータが降下していく。

ガラス張りのエレベータからはドッグの中がよく見える。

「あれ?」

鉄筋とコンクリートのみで構成される地下ドッグに一席の船が鎮座していた。

その全長はおよそ250メートル。宇宙戦艦にしては少々小ぶりなサイズ。

「あら、気づいた?」

「アメリカの旧型艦でも日本のでもないな。あれはどここの船だ?」

「どこの国のものでもないわ。あれは、ARIASが独自に造り上げた戦艦よ」

「造り上げたね……」

ドツ内でひときわ目立つ漆黒の船体。

船体中央からやや前方にそびえ立つ巨大な艦橋。

その周りをハリネズミの針のようにたくさんの機関銃が設置されている。

そして、何より目を引くのが、前看板に2基、後部甲板に2基取り付けられたら大きな主砲。あれほどの大口径の主砲を持った戦艦なんて今までみたことがない。

「全長256メートル。主砲に46センチ連装レールガンを採用しているのよ」

「あの主砲はレーザー砲じゃないのか？」

「固形レーザー弾頭に切り替えれば、レーザーも撃てるわよ」ブスツとした顔で答える姫川。いったいオマエになにがあったんだ？

「一撃で敵の戦力を削ぐためには威力高いレールガンが使い勝手がいいし、状況に応じて主砲弾を変更できるのも強みなの」「なるほどな……」

確かにレーザー砲より威力の高い兵器かもしれないが、砲弾を発射するのに莫大な量の電気が必要となる。

生半可なエンジンでは砲弾の1発すら発射できないだろう。

「ちゃんと飛ぶのか？」

「失礼ね。本格的な航海には出てないけど、ちゃんとテストはクリアしているわよ！」

「刀夜。この船の性能は私が保証するわ。少なくとも私が今まで乗ってきた戦艦の中で1番よ」

姉さんが1番と評価するということは、正規軍の新型艦並みの戦闘能力を持っていることということだ。

「あの、長官。もしかてコレに乗せるのですか？」

横で姫川が俺と漆黒の戦艦を互いに見て不満ありげに姉さんに問いかける。

なんだよ。俺が乗ったら悪いのかよ。

「そうね。刀夜にはこの宇宙戦艦銀河の航空課に所属してもらおう」

とになるわね」

「そうですね……」

1人、肩をガツクリとうなだれる姫川。

「俺が乗ったらダメなのかよ」

「ダメに決まってるじゃない！」

訳の分からないことでキレ始めたぞ。

姫川、カルシウムはしっかりと摂取した方がいい。

たださえ、最近の子どもはキレやすいって言われてるんだからな。

「で、何でいけないんだよ」

「銀河の艦長がこのワ・タ・シだからよ！」

へえ。艦長ね。

世の中にはこんなにもキレやすい艦長が……。

「か、艦長!？」

驚きのあまり、俺の心臓が危うく体を離れてどこか遠くに飛び立っていくところだった。

「そうよ。だから銀河には乗ってほしくないの！」
なるほど。

ようやく納得できたぞ。艦長という上位職だったから、あんなにプライドを気にしてたんだな。

なら、俺からも1つ言わさせてくれ。

プライド気にしてるなら、鼻歌歌いながら掃除するな!

紛らわしいじゃねえか。

だが、そんな俺たちをよそに姉さんかというと。

「あら、大変ね」

とって姉さんは呑気に顎に手を当てて考えているフリをしている。どうやら、変更する意志は無いらしい。

「姫川艦長。お願いできないかしら？」

「うっ。分かりました。坂上刀夜の乗艦を許可します」

姫川はうまい具合に姉さんに丸め込まれてしまう。

まあ、姉さんの頼みごとを断れる人を見たことは無いんだがな。

「そうだ。お願い次いでもう1つお願い聞いてもらっていい？」

「何でしょうか？」

「刀夜とペア組んであげて」

姉さんの口から襲撃の一言が発せられる。

「はあ!？」

俺と姫川は見事にハモってしまった。

丸く事が収まりそうだったのに、新たな火種を放り込む形となつてなつたようだ。

「長官。一応確認しますが、ペアとは、あの戦闘機パイロットとオペレーターの2人1組のイージスペアのことではないですよね？」

「何言ってるの。そのイージスペアに決まってるじゃない」

ARIASは正規軍などとは違い、戦闘機パイロット1人、1人に専属オペレーターが付き、戦艦の中から指示を出してたり、戦闘区域の情報交換をする。例えば、戦艦のレーダーで敵の情報をオペレーターが教え、レーダーで拾えないステレス機などの情報をパイロットが報告するといった感じた。

さらに、専属オペレーターを付けることにより、あらゆる事態に臨機応変に対応でき、隊列を乱れないように出来る。

「確かに専属オペレーターが必要ですが。私でなくても他にもオペレーターはいますよね!？」

「もう人数分埋まっているのよ。それに喧嘩するほど仲がいい言うものね」

「そ、そんな……」「マジかよ……」

おそらく姉さんの頭の中では、オペレーターを新しく雇うのめんどくさいのよね。よし、艦長に1人2役としてオペレーターもやってもらおう!

といった方程式が作られたに違いない。

おいおい。

この船。ほんとに大丈夫なのかよ。

一抹の不安が過ぎつたのはきつと俺だけではなかったはずだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0020ba/>

アリソラ ~ A R I A Sの宇宙(そら)~

2012年1月3日01時50分発行